

第5章 高等部本科

I 結果と考察

1. 回答した教員の属性についての回答

1) 教員の属性

回答した教員の年齢に対する回答では、平均年齢 42.57 歳で、最小値 24 歳、最大値、63 歳であった。また教員歴は、平均値 17.54 年で最小値 1 年、最大値 44 年であった。

表 5-1 に聴覚障害児に対する指導歴、特別支援学校（聴覚障害）での指導歴、特別支援学校（聴覚障害以外の障害種）での指導経歴、難聴学級ないし通級指導教室での指導歴、通常学級での指導歴の回答の結果を示した。

表 5-1 回答した教員の指導歴 () 内は標準偏差

| | | 全体 | 無回答 | 平均値 | 最小値 | 最大値 |
|--------------------------|----------|------------|-----------|---------------|-----|-----|
| 聴覚障害児に対する指導歴 | 回答数 % | 266 100 | 3 1.1 | 9.14 (7.7) | 0 | 34 |
| 特別支援学校（聴覚障害）での指導歴 | 回答数 % | 266 100 | 3 1.1 | 7.80 (7.6) | 0 | 34 |
| 特別支援学校（聴覚障害以外の障害種）での指導経歴 | 回答数 % | 266 100 | 16 6.0 | 4.81 (6.2) | 0 | 26 |
| 難聴学級ないし通級指導教室での指導歴 | 回答数 % | 266 100 | 10 3.8 | 0.15 (0.7) | 0 | 5 |
| 通常学級での指導歴 | 回答数 % | 266 100 | 15 5.6 | 2.21 (5.9) | 0 | 31 |

2) 人工内耳装用児の指導にあたって学習したい研修内容

表 5-2 に学習したい研修内容の記述回答の分類と回答数を示した。

重複障害ありなしともに、「基礎的研修」が多く、その内容は、人工内耳の構造や取り扱い上の注意、人工内耳装用児に対する配慮事項などであった。また手術に関する内容や関連機器に関する情報、補聴器との違いなど医療やリハビリテーション機器に関する研修を希望する回答も見られた。その他に、人工内耳装用児の言語、心理、学習特性など発達に関する内容とこれに関する指導法の研修を望む回答がみられた。また成人人工内耳装用児の講演との回答もあった。さらに、保護者の指導に関する研修を求める回答も見られた。

表 5-2 学習したい研修内容の分類と回答数

| 重複の有無 回答 | 重複あり | | | 重複なし | | |
|----------------------------|------|------|------|------|------|------|
| | 1 年生 | 2 年生 | 3 年生 | 1 年生 | 2 年生 | 3 年生 |
| 管理・周辺機器（ロッジャーなど） | 1 | 1 | 4 | 3 | 1 | 3 |
| 手術方法や手続き、CI の長所・短所、HA との違い | 4 | 2 | 2 | 2 | 0 | 0 |
| 基礎的研修（配慮事項など） | 7 | 16 | 17 | 28 | 39 | 27 |
| 医療機関との連携方法 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| CI 装用児の言語、心理、学習の特性 | 9 | 7 | 3 | 4 | 5 | 3 |
| 指導の方法（言語・聴覚活用など） | 3 | 1 | 0 | 6 | 2 | 11 |
| CI 装用児の進路の実態 | 0 | 0 | 0 | 4 | 6 | 3 |

| | | | | | | |
|------------------|----|----|----|----|----|----|
| CI 装用児のアイデンティティ | 1 | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| CI 装用成人の話（心理面など） | 2 | 0 | 0 | 5 | 3 | 2 |
| 保護者指導 | 0 | 0 | 0 | 3 | 0 | 0 |
| 重複障害児の CI 装用の効果 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 |
| 特になし | 0 | 0 | 0 | 4 | 6 | 3 |
| 計 | 27 | 28 | 26 | 60 | 62 | 54 |

表 5-3 生徒数及び人工内耳装用生徒数 () 内は標準偏差

| | | | 全体 | 無回答 | 平均値 | 最小値 | 最大値 |
|-------------|-----------------|----------|------------|----------|----------------|-----|-----|
| 高等部本科 全体 | 生徒総数 | 回答数 % | 266 100 | 3 1.1 | 4.97 (3.98) | 0 | 47 |
| | うち人工内耳 装用生徒数 | 回答数 % | 266 100 | 3 1.1 | 2.20 (1.18) | 0 | 17 |
| 重複あり | 生徒総数 | 回答数 % | 60 100 | 0 0 | 3.18 (3.34) | 0 | 23 |
| | うち人工内耳 装用生徒数 | 回答数 % | 60 100 | 0 0 | 1.55 (1.51) | 0 | 8 |
| 重複なし | 生徒総数 | 回答数 % | 199 100 | 0 0 | 5.51 (4.05) | 0 | 47 |
| | うち人工内耳 装用生徒数 | 回答数 % | 199 100 | 0 0 | 2.43 (1.86) | 0 | 17 |

2. 人工内耳装用児が在籍する学級について

1) 生徒数

表 5-3 に重複ありとなしを合計した高等部本科全体及び重複のありなしで分けた場合の回答結果を示した。なお、重複なしの生徒総数の 47 と人工内耳装用生徒数の 17 は、学級在籍人数ではなく高等部本科全体の数字と思われる。

2) 医療機関との連携の有無

医療機関との連携の有無について、高等部本科全体では回答数が 266、無回答は 3 であった。うち、連携ありとの回答は、67 で全体の 25.2%、連携なしとの回答が 196 で全体の 73.7% であった。重複ありでは回答数が 60、無回答は 0 であった。連携ありとの回答は 15 で全体の 25%、連携なしとの回答は 45 で全体の 75% であった。重複なしでは、回答数が 199、無回答は 3 であった。連携ありとの回答は 49 で全体の 24.6%、連携なしとの回答が 147 で全体の 73.9% であった。以上のことから、医療機関と連携している学校は、およそ 4 分の 1 であり、これは重複のありなしで、ほとんど差がなかった。

表 5-4 に、連携の内容が記述された記述回答の分類と回答数を示した。最も多かったのは、重複ありなしともに、定期健診における聞こえの状態や機器の調整に関する情報を医療機関から受けるというものであった。また、学校での生徒の状態を医療機関に伝え、必要に応じて医師からコメントもらう、ケースカンファレンス、支援会議、連絡協議会、ネットワーク会議に出席という、医療機関とのやり取りを行う例も見られた。

表 5-4 医療機関との連携の内容と回答数

| 重複の有無 | 重複あり | | | 重複なし | | |
|--------------------------------|------|------|------|------|------|------|
| 回答 | 1 年生 | 2 年生 | 3 年生 | 1 年生 | 2 年生 | 3 年生 |
| 定期健診（聴力検査、マッピングなど） | 5 | 0 | 4 | 11 | 15 | 5 |
| 医師、言語聴覚士の指導 | 2 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 |
| 言語聴覚士、作業療法士の来校による相談、講演、情報交換 | 2 | 0 | 0 | 3 | 1 | 0 |
| 病院のカンファレンスに出席 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 | 4 |
| 両親講座に出席 | 0 | 1 | 0 | 0 | 4 | 0 |
| ケースカンファレンス、支援会議、連絡協議会、ネットワーク会議 | 0 | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 |
| 耳鼻科以外との連携（精神科） | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 |
| 学校の様子（聴力検査含む）を医療機関に伝える | 2 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 |
| 計 | 11 | 2 | 4 | 16 | 24 | 11 |

表 5-5 補聴器装用児と比べて、指導上、特に課題と感じている点の分類と回答数

| 重複の有無 | 重複あり | | | 重複なし | | |
|----------------------------------|------|------|------|------|------|------|
| 回答 | 1 年生 | 2 年生 | 3 年生 | 1 年生 | 2 年生 | 3 年生 |
| 人工内耳に関する基礎的知識や管理方法の本院及び保護者に対する指導 | 0 | 4 | 4 | 5 | 18 | 1 |
| 自宅での活用方法 | 1 | 1 | 0 | 3 | 0 | 1 |
| 人工内耳を使わない | 2 | 5 | 0 | 6 | 5 | 2 |
| 聞き間違いや聞き洩らしがあることの認識と指導 | 2 | 3 | 2 | 22 | 14 | 14 |
| 聞こえは良いが理解していない | 4 | 1 | 0 | 0 | 4 | 3 |
| 発音・発語の不明瞭さ | 1 | 0 | 0 | 7 | 1 | 0 |
| 聞こえていると思い話者を見ない | 1 | 0 | 0 | 3 | 1 | 3 |
| 健聴者とのコミュニケーション | 0 | 0 | 2 | 5 | 0 | 0 |
| 手話を用いない生徒への指導 | 0 | 0 | 0 | 2 | 10 | 5 |
| 行動上の制約がある点 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 自閉症の生徒の音過敏 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 |
| 人工内耳装用者のモデル不足 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4 |
| 頭痛が生じる | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| 最適な大きさの音の提示の仕方 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 |
| 個人差の大きさ | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 |
| 特になし | 2 | 8 | 8 | 14 | 10 | 23 |
| 計 | 14 | 22 | 16 | 68 | 64 | 60 |

3. 人工内耳装用児の指導について

1) 補聴器装用児と比べて、指導上、特に課題と感じている点

表 5-5 に補聴器装用児と比べて、指導上、特に課題と感じている点に関する記述回答の分類と回答数を示した。重複ありとなしを比較すると、「聞き間違いや聞き漏らしがあることの認識と指導」が重複なしに多かった。これは、重複なしでは教科指導や言語を用いた指導の時間数が、重複ありよりも多く、人工内耳を装用しても正しく聞き取れない場合のあることが、教師に見えやすくなるためと思われる。また重複なしでは、人工内耳に関する知識や管理方法に関する課題を指摘する回答も多く、このことから重複なしの生徒には、障害補償機器の理解や管理を人工内耳装用生徒自身に行わせていることがうかがえる。その他に手話を用いない生徒への指導という回答があり、これは重複なしにのみ見られた。音声言語のみでコミュニケーションを行う生徒が重複なしには多いことがうかがえる。一方で、「特になし」とする回答も多く、人工内耳装用時にも補聴器装用児と同様の課題があることが示唆される。

2) 補聴器装用の生徒と比べて、指導上工夫している点

表 5-6 に補聴器装用児と比べて、指導上工夫している点に関する記述回答の分類と回答数を示した。重複なしでは音声を利用するよう工夫しているという回答が多く、人工内耳装用児の聞こえの良さを生かした指導を心掛けていることがうかがえる。ただし、ことばを正しく受信できているか、話された内容を理解できているかの確認については、視覚的手段である文字や指文字を用いる工夫をしていることが分かった。また、衝撃への対策、人工内耳の装用側から話しかけるなど指導上の工夫が、安全面への配慮やコミュニケーションの環境設定にもなされていることが示された。加えて、「特になし」とする回答も多く、補聴器装用児と同様の工夫がなされていることが示唆される。その他、「多様なコミュニケーション手段を獲得させるは、」重複ありでは回答がなく、重複なしのみに回答が認められた。1)の指導上の課題では「手話を用いない生徒への指導」が重複なしの課題として挙げられ、これに対応して指導の工夫を行っていることの反映と思われる。

表 5-6 補聴器装用児と比べて、指導上工夫している点の分類と回答数

| 重複の有無 | 重複あり | | | 重複なし | | |
|-----------------------|------|------|------|------|------|------|
| 回答 | 1 年生 | 2 年生 | 3 年生 | 1 年生 | 2 年生 | 3 年生 |
| 聴覚や口話を主に使う | 5 | 4 | 5 | 6 | 10 | 16 |
| 文字や指文字の利用による理解の確認 | 3 | 2 | 3 | 11 | 9 | 17 |
| 音声と手話を併用する | 0 | 0 | 0 | 4 | 4 | 4 |
| 人工内耳装用方向からの話しかけ | 0 | 1 | 2 | 2 | 6 | 0 |
| 補聴器装用児よりも多くの語彙を指導する | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 |
| 簡単な言葉で話す | 0 | 0 | 0 | 2 | 0 | 0 |
| 発音・発語の正確さを求める | 0 | 1 | 2 | 1 | 1 | 2 |
| 生徒の注意が教師に向いてから話す | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 8 |
| 多様なコミュニケーション手段を獲得させる | 0 | 0 | 0 | 4 | 4 | 1 |
| コミュニケーションのマナー指導 | 0 | 0 | 0 | 4 | 0 | 1 |
| 衝撃への対策 | 1 | 2 | 2 | 0 | 9 | 2 |
| 人工内耳の装用の確認 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 |
| 人工内耳と補聴器のメリットの双方を利用する | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 人工内耳の管理に関する知識 | 3 | 3 | 1 | 5 | 0 | 0 |
| その他 | 1 | 1 | 0 | 1 | 1 | 0 |
| 特になし | 1 | 3 | 5 | 20 | 26 | 11 |
| 計 | 15 | 17 | 21 | 60 | 71 | 62 |

3) 補聴器装用の生徒と比べて、指導しやすい点

表 5-7 に補聴器装用の生徒と比べて、指導しやすい点の回答の分類と回答数を示した。音や言葉の反応の良さが、重複ありなしともに最も多く、語彙数の多さ、コミュニケーションの良さ、指導できる語の多さに関連しているものと思われる。人工内耳の装用が、言語やコミュニケーションの力を高め、教師の指導の幅を広げていることがうかがえる。一方で、「特になし」の回答も特に多く、人工内耳の装用は、音や言葉の受信には効果が高いものの、聞こえの改善のほかの教育的目標においては、課題が多いということがうかがえる。

表 5-7 補聴器装用児と比べて、指導しやすい点の分類と回答数

| 重複の有無 | 重複あり | | | 重複なし | | |
|---------------|------|------|------|------|------|------|
| 回答 | 1 年生 | 2 年生 | 3 年生 | 1 年生 | 2 年生 | 3 年生 |
| 音や言葉に対する反応の良さ | 6 | 11 | 3 | 13 | 17 | 11 |
| 語彙数の多さ | 2 | 1 | 0 | 6 | 3 | 0 |
| コミュニケーションの良さ | 3 | 1 | 5 | 19 | 17 | 0 |
| 指導できる語の多さ | 1 | 0 | 0 | 15 | 12 | 0 |
| 思考力の高さ | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4 |
| 機器の管理 | 9 | 4 | 2 | 1 | 3 | 2 |
| 注意する力が高い | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| 特になし | 8 | 8 | 7 | 21 | 27 | 12 |
| 計 | 29 | 25 | 17 | 75 | 79 | 30 |

表 5-8 受診年齢の年代 () 内は%

| 重複の有無 | 重複あり 平均値 1.14 歳、最小値 0 歳、最大値 5 歳 | | | 重複なし 平均値 1.25 歳、最小値 0 歳、最大値 12.58 歳 | | |
|--------|------------------------------------|----------|-------|----------------------------------------|----------|----------|
| | 1 年生 | 2 年生 | 3 年生 | 1 年生 | 2 年生 | 3 年生 |
| 年齢 | | | | | | |
| 1 歳未満 | 4(25.0) | 10(41.7) | 6(30) | 16(26.2) | 25(31.3) | 27(46.6) |
| 1 歳 | 5(31.3) | 10(41.7) | 5(25) | 15(24.6) | 18(22.5) | 9(15.5) |
| 2 歳 | 0(0) | 0(0) | 3(15) | 5(8.2) | 5(6.3) | 15(12.1) |
| 3 歳 | 1(6.3) | 0(0) | 3(15) | 2(3.3) | 3(3.8) | 0(0) |
| 4 歳 | 0(0) | 0(0) | 0(0) | 0(0) | 1(1.8) | 0(0) |
| 5-9 歳 | 0(0) | 1(4.2) | 0(0) | 0(0) | 3(3.8) | 0(0) |
| 10 歳以上 | 0(0) | 0(0) | 0(0) | 0(0) | 2(2.5) | 0(0) |
| 無回答 | 6(37.5) | 3(12.5) | 3(15) | 23(37.7) | 23(28.8) | 15(25.9) |
| 計 | 16 | 24 | 20 | 61 | 80 | 66 |

4. 対象生徒について

1) 年齢

生徒の年齢は、重複ありとなしを合計した高等部本科全体では、平均値が 16.56 歳、最小値 15 歳、最大値 20 歳であった。

2) 受診時年齢

受診時の年齢について、重複ありとなしを加えた高等部本科全体では、平均値 1.22 歳、最小値 0 歳、最大値 12.58 歳であった。1 歳までに 152 人 (57.2%)、3 歳までに 181 人 (78.1%) の者が受診していた。ただし無回答の割合が高く、生徒の受診年齢を高等部本科教員が把握していない可能性が示唆される。

表 5-8 に重複ありと重複なしの受診年齢の年代における数と割合を示した。重複ありでは、1 歳までに 40 人 (59.5%)、3 歳までに 47 人 (78.3%) の者が受診していた。重複なしでは、1 歳までに 110 人 (55%)、3 歳までに 132 人 (63.8%) の者が受診していた。

以上のことから、対象時の受診年齢は、どの学年においても重複のありなしともに平均は 1 歳代であり、また半数以上の者が 3 歳までに受診していた。

3) 人工内耳の装用状態

対象生徒の人工内耳装用状態について、重複ありと重複なしを合計した高等部本科全体では右耳装用が 144 人 (54.1%)、左耳が 84 人 (31.6%)、両耳装用が 36 (13.5%) であった。表 5-9 に重複のありなしで分けた人工内耳装用の状態を示した。どの学年においても重複ありなしとも

に人工内耳を片耳に装用している者が多かった。

表 5-9 人工内耳の装用状態 () 内は%

| 重複の有無 | 重複あり | | | 重複なし | | |
|-----------|---------|----------|--------|----------|----------|----------|
| 左右 年 齢 | 1 年生 | 2 年生 | 3 年生 | 1 年生 | 2 年生 | 3 年生 |
| 右 耳 | 12(75) | 14(58.3) | 8(40) | 35(57.4) | 43(53.8) | 29(50) |
| 左 耳 | 3(18.8) | 6(25) | 12(60) | 17(27.9) | 25(31.3) | 19(32.8) |
| 両 耳 | 1(6.3) | 4(16.7) | 0(0) | 9(14.8) | 12(15) | 9(15.5) |
| 無回答 | 0(0) | 0(0) | 0(0) | 0(0) | 0(0) | 1(1.7) |
| 計 | 16 | 24 | 20 | 61 | 80 | 58 |

また「片耳装用の場合、もう一方の耳への補聴器装用の有無」については、重複ありと重複なしを合計した高等部本科全体では、有りが 126 人 (47.4%)、無しが 108 人 (40.6%) であった。表 5-10 に重複のありなしで分けた人工内耳反対側での補聴器装用の有無の状態を示した。ほとんどの学年で重複ありなしともに、おおよそ半数の者が反対側に補聴器を装用していた。

表 5-10 人工内耳の反対側での補聴器の有無 () 内は%

| 重複の有無 | 重複あり | | | 重複なし | | |
|-----------|-------|----------|--------|----------|----------|----------|
| 有無 学 年 | 1 年生 | 2 年生 | 3 年生 | 1 年生 | 2 年生 | 3 年生 |
| あり | 8(50) | 14(58.3) | 13(65) | 33(54.1) | 36(45) | 22(37.9) |
| なし | 8(50) | 8(33.3) | 7(35) | 18(29.5) | 34(42.5) | 28(48.3) |
| 無回答 | 0(0) | 2(8.3) | 0(0) | 10(16.4) | 10(12.5) | 8(13.8) |
| 計 | 16 | 24 | 20 | 61 | 80 | 58 |

「学校での補聴援助システム使用の有無」の問いに対しては、重複ありと重複なしを合計した高等部本科全体では、有りが 81 人 (30.5%)、無しが 177 人 (66.5%) であった。表 5-11 に重複のありなしで分けた補聴援助システムの有無の状態を示した。どの学年においても重複ありなしともに、おおよそ 3 割に補聴援助システムがあるとの回答がみられた。

表 5-11 補聴援助システムの有無 () 内は%

| 重複の有無 | 重複あり | | | 重複なし | | |
|-----------|----------|----------|--------|----------|----------|----------|
| 有無 学 年 | 1 年生 | 2 年生 | 3 年生 | 1 年生 | 2 年生 | 3 年生 |
| あり | 6(37.5) | 7(29.2) | 7(35) | 19(31.1) | 21(26.3) | 19(32.8) |
| なし | 10(62.5) | 17(70.8) | 13(65) | 39(63.9) | 56(70) | 39(67.2) |
| 無回答 | 0(0) | 0(0) | 0(0) | 3(4.9) | 3(3.8) | 0(0) |
| 計 | 16 | 24 | 20 | 61 | 80 | 58 |

以上のことから人工内耳の装用状態については、片耳装用が多かった。また片耳装用者のうち約半数の者が、人工内耳の反対側に補聴器を装用し、右耳装用と左耳装用が、おおよそ半々であった。補聴援助システムの使用があると回答したのは約 3 割であった。これらは、学年や重複障害の有無に関係なかった。

4) 人工内耳装用開始時期

人工内耳装用開始時期について重複ありと重複なしを合計した高等部本科全体では、平均値

5.13 歳、最小値 0.75 歳、最大値 17 歳であった。1 歳までに 152 人（57.2%）、3 歳までに 181 人（78.1%）の者が受診していた。無回答は、25.9%であった。無回答の割合が、他の問いと比較して高く、高等部本科の生徒の人工内耳開始年齢について、受診の年齢同様に高等部本科教員が把握していないことが示唆される。

表 5-12 に重複ありと重複なしの人工内耳の装用菓子年齢の数と割合を示した。学年や重複ありなしでの明らかな傾向が認められなかった。

表 5-12 人工内耳装用開始時期 () 内は%

| 重複の有無 | 重複あり 平均値 5.14 歳、最小値 2 歳、最大値 17 歳 | | | 重複なし 平均値 5.16 歳、最小値 0 歳、最大値 16 歳 | | |
|--------|-------------------------------------|----------|-------|-------------------------------------|----------|----------|
| | 1 年生 | 2 年生 | 3 年生 | 1 年生 | 2 年生 | 3 年生 |
| 年齢 | | | | | | |
| 1 歳未満 | 0(0) | 0(0) | 0(0) | 1(1.6) | 0(0) | 0(0) |
| 1 歳 | 0(0) | 0(0) | 0(0) | 1(1.6) | 6(7.5) | 2(3.4) |
| 2 歳 | 0(0) | 6(25) | 1(5) | 13(21.3) | 11(13.8) | 10(17.2) |
| 3 歳 | 1(6.3) | 13(54.2) | 3(35) | 12(19.7) | 13(16.3) | 11(19) |
| 4 歳 | 4(25) | 2(8.3) | 2(10) | 3(4.9) | 7(8.8) | 3(5.2) |
| 5-9 歳 | 3(18.8) | 1(4.2) | 6(30) | 7(11.5) | 17(21.3) | 3(5.2) |
| 10 歳以上 | 4(25) | 2(8.3) | 2(10) | 3(4.9) | 10(12.5) | 8(13.8) |
| 無回答 | 4(25) | 0(0) | 2(10) | 21(34.4) | 16(20) | 21(36.2) |
| 計 | 16 | 24 | 16 | 61 | 80 | 58 |

5) 手術前の平均聴力レベル

手術前の平均聴力レベルは、重複ありと重複なしを合計した高等部本科全体では、右耳 106dB で標準偏差は 15.62、最小値が 5dB、最大値が 137dB であった。左耳 106dB、標準偏差は 15.2、最小値が 1 dB、最大値が 134dB であった。

表 5-13 に学年別に重複ありなしに分類した結果を示した。重複のありなしにかかわらず、ほとんどの学年いずれも 100dB 周辺の聴力であった。ただし、いくつかの値は正確に測定されなかったか、記入を誤ったか、いずれかによると思われるものが見られた。

表 5-13 手術前の平均聴力レベル () 内は、標準偏差

| 重複の有無 | 重複あり | | | | | | 重複なし | | | | | |
|-------------|---------------|---------------|---------------|-------------|-------------|--------------|--------------|---------------|---------------|--------------|---------------|--------------|
| | 1 年生 | | 2 年生 | | 3 年生 | | 1 年生 | | 2 年生 | | 3 年生 | |
| 学年 | | | | | | | | | | | | |
| 耳の左右 | 右 | 左 | 右 | 左 | 右 | 左 | 右 | 左 | 右 | 左 | 右 | 左 |
| 平均聴力 レベル | 107 (12.7) | 111 (18.5) | 108 (11.4) | 113 (10) | 98 (9.9) | 102 (9.8) | 99 (23.4) | 100 (24.4) | 106 (11.6) | 106 (9.5) | 111 (11.5) | 108 (9.7) |
| 最小値 | 88 | 80 | 89 | 100 | 86 | 86 | 5 | 1 | 81 | 90 | 91 | 92 |
| 最大値 | 124 | 127 | 128 | 129 | 110 | 110 | 123 | 134 | 134 | 125 | 137 | 134 |

6) 現在の平均聴力レベル

現在の平均聴力レベルは、重複ありと重複なしを合計した高等部本科全体では、右耳 39dB で標準偏差は 27.3、最小値が 10dB、最大値が 128dB。左耳は、47dB、標準偏差は 29.5、最小値が 15B、最大値が 128dB であった。表 5-14 に学年別に重複ありなしに分類した結果を示した。重

重複ありは、50 から 60dB 台が多く、重複なしは、30dB 台が多く、両者にやや差がみられた。

表 5-14 人工内耳又は補聴器装用下での平均聴力レベル ()内は、標準偏差

| 重複の有無 | 重複あり | | | | | | 重複なし | | | | | |
|-------------|--------------|----------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|
| 学年 | 1 年生 | | 2 年生 | | 3 年生 | | 1 年生 | | 2 年生 | | 3 年生 | |
| 耳の左右 | 右 | 左 | 右 | 左 | 右 | 左 | 右 | 左 | 右 | 左 | 右 | 左 |
| 平均聴力 レベル | 57 (37.9) | 65 35 | 45 (32.6) | 53 (33.2) | 56 (35.6) | 57 (36.7) | 35 (22.1) | 44 (25.6) | 38 (24.8) | 48 (29.3) | 31 (22.2) | 36 (21.9) |
| 最小値 | 15 | 23 | 25 | 20 | 12 | 22 | 10 | 15 | 15 | 16 | 15 | 18 |
| 最大値 | 122 | 109 | 124 | 122 | 128 | 122 | 105 | 103 | 127 | 128 | 123 | 112 |

表 5-15 人工内耳又は補聴器装用していない耳の平均聴力レベル ()内は、標準偏差

| 重複の有無 | 重複あり | | | 重複なし | | |
|-------------|--------------|---------------|---------------|---------------|-------------|---------------|
| 学年 | 1 年生 | 2 年生 | 3 年生 | 1 年生 | 2 年生 | 3 年生 |
| 平均聴力 レベル | 99 (19.4) | 105 (30.6) | 114 (19.9) | 106 (11.2) | 108 (15) | 107 (12.1) |
| 最小値 | 63 | 35 | 70 | 90 | 50 | 89 |
| 最大値 | 121 | 131 | 130 | 128 | 130 | 134 |

人工内耳または補聴器を装用していない耳の平均聴力レベルは、重複ありと重複なしを合計した高等部本科全体では、平均値が 107dB、標準偏差 15.8、最小値 35、最大値 134 であった。表 5-15 に学年別に重複ありなしに分類した結果を示した。概ね 100dB 台であり、学年や重複あり無しの差は認められなかった。

7) 重複障害の有無

重複障害の有無については、重複ありと重複なしを合計した高等部本科全体では有りが 60 で 22.6% (回答数 266)、無しが 199 で 74.8%であった。表 5-16 に重複する障害の種別の数と割合を示した。いずれの学年でも知的障害が最も多かった。

以上のことから重複障害は、高等部本科生徒の全体の約 2 割程度であり、重複している障害種は、どの学年においても知的障害がもっと多く 7~8 割程度であることがわかった。

表 5-16 重複する障害種とその数及び割合 ()内は%

| 障害種 | 学年 | 1 年生 | 2 年生 | 3 年生 |
|---------|----|--------|----------|--------|
| 視覚障害 | | 0(0) | 3(12.5) | 2(10) |
| 知的障害 | | 13(81) | 17(70.8) | 14(70) |
| 肢体不自由 | | 0(0) | 0(0) | 3(15) |
| 病弱・身体虚弱 | | 0(0) | 2(8.3) | 0(0) |
| その他 | | 4(25) | 7(29.2) | 5(20) |
| 無回答 | | 1(6.3) | 2(8.3) | 0(0) |

8) 普段使用するコミュニケーションモード（複数回答可）

生徒が普段使用するコミュニケーションモードについては、重複ありと重複なしを合計した高等部本科全体では、266 の回答があった。図 5-1 には、コミュニケーションモードの種類と割合を示した。その結果、手話、音声、指文字を中心として、読話やキューサイン、筆談も利用されていたことがわかった。その他には、スマホのアプリやライン、口話との回答がみられた。

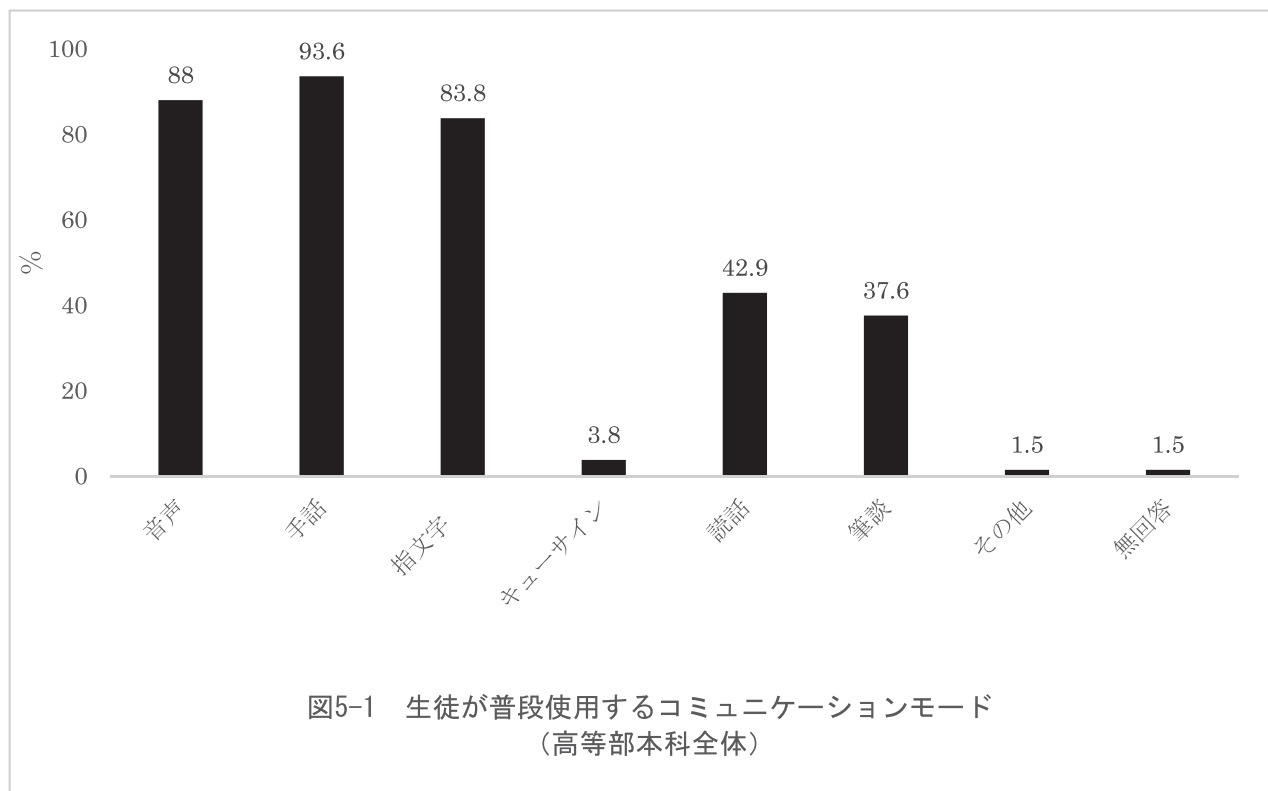


図5-1 生徒が普段使用するコミュニケーションモード
(高等部本科全体)

表 5-17 生徒が普段使用するコミュニケーションモード () 内は%

| 重複の有無 | | 重複あり | | | 重複なし | | |
|--------|----|----------|----------|---------|----------|----------|----------|
| モード | 学年 | 1 年生 | 2 年生 | 3 年生 | 1 年生 | 2 年生 | 3 年生 |
| 音声 | | 10(62.5) | 21(87.5) | 13(65) | 56(91.8) | 76(95) | 55(94.8) |
| 手話 | | 16(100) | 20(83.3) | 20(100) | 56(91.8) | 76(95) | 56(96.6) |
| 指文字 | | 11(68.8) | 19(79.2) | 18(90) | 52(85.2) | 70(87.5) | 50(86.2) |
| キューサイン | | 1(6.3) | 0(0) | 0(0) | 2(3.3) | 4(5) | 3(5.2) |
| 読話 | | 4(25) | 9(37.5) | 6(30) | 31(50.8) | 40(50) | 22(37.9) |
| 筆談 | | 8(50) | 12(50) | 7(35) | 18(29.5) | 29(36.3) | 23(37.9) |
| その他 | | 0(0) | 0(0) | 1(5) | 0(0) | 2(2.5) | 1(1.7) |
| 無回答 | | 0(0) | 0(0) | 0(0) | 1(1.6) | 0(0) | 1(1.7) |
| 回答数 | | 16 | 24 | 20 | 61 | 80 | 58 |

表 5-17 に学年別に重複ありなしの結果を示した。両者のいずれの学年でも手話と指文字の使用率が高い。一方、音声の使用割合が、重複ありで低くなり、読話も重複ありで、重複なしより、やや低かった。

以上のことから、普段生徒が用いるコミュニケーションモードについて重複ありと重複なしを合計した高等部本科全体では、いずれの学年でも手話や音声など多様な手段を用いていることがわかった。ただし、重複ありなしの比較では、重複なしにおいて、音声や読話の使用の割合が、

重複ありより低いことが分かった。

9) 上記のコミュニケーションモードの中で、学校での学習時に用いるもの

図 5-2 に重複ありと重複なしを合計した高等部本科全体における各コミュニケーションモードの割合を示した。回答数は、266 であった。主として音声と手話が使用され、普段使用するコミュニケーションモードよりは、この 2 者の割合が高かった。

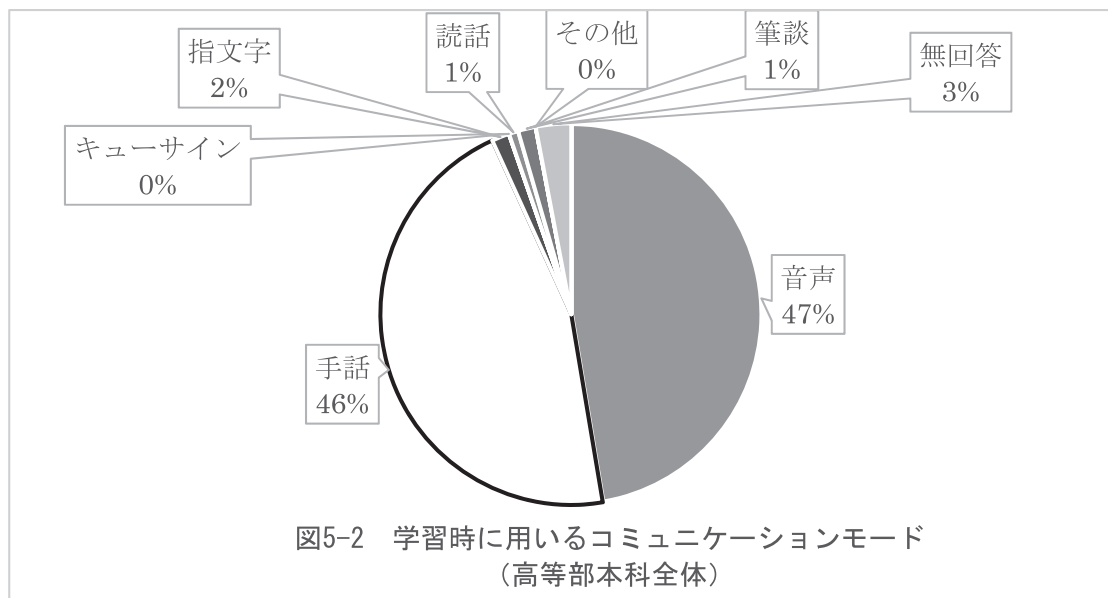


表 5-18 学習時に使用するコミュニケーションモードの第 1 番目 () 内は%

| 重複の有無 | | 重複あり | | | 重複なし | | |
|--------|----|--------|----------|---------|----------|----------|----------|
| モード | 学年 | 1 年生 | 2 年生 | 3 年生 | 1 年生 | 2 年生 | 3 年生 |
| 音声 | | 4(25) | 5(20.8) | 4(65) | 38(62.3) | 44(55) | 31(53.4) |
| 手話 | | 12(75) | 16(66.7) | 12(100) | 20(32.8) | 33(41.3) | 24(41.4) |
| 指文字 | | 0(0) | 0(0) | 2(90) | 1(1.6) | 1(1.3) | 0(0) |
| キューサイン | | 0(0) | 0(0) | 0(0) | 0(0) | 0(0) | 0(0) |
| 読話 | | 0(0) | 0(0) | 0(30) | 1(1.6) | 1(1.3) | 0(0) |
| 筆談 | | 0(0) | 2(8.3) | 2(35) | 0(0) | 0(0) | 0(0) |
| その他 | | 0(0) | 0(0) | 0(5) | 0(0) | 0(0) | 0(0) |
| 無回答 | | 0(0) | 1(4.2) | 0(0) | 1(1.6) | 1(1.3) | 3(5.2) |
| 回答数 | | 16 | 24 | 20 | 61 | 80 | 58 |

表 5-19 学習時に使用するコミュニケーションモードの第 2 番目 () 内は%

| 重複の有無 | | 重複あり | | | 重複なし | | |
|--------|----|---------|---------|-------|----------|----------|----------|
| モード | 学年 | 1 年生 | 2 年生 | 3 年生 | 1 年生 | 2 年生 | 3 年生 |
| 音声 | | 2(12.5) | 8(33.3) | 4(20) | 11(18.0) | 18(22.5) | 10(17.2) |
| 手話 | | 3(18.8) | 5(20.8) | 6(30) | 26(42.6) | 38(47.5) | 31(53.4) |
| 指文字 | | 7(43.8) | 3(12.5) | 6(30) | 16(26.6) | 11(13.8) | 11(19) |
| キューサイン | | 0(0) | 0(0) | 0(0) | 0(0) | 1(1.3) | 0(0) |
| 読話 | | 0(0) | 2(8.3) | 0(30) | 7(11.5) | 0(0) | 3(5.2) |
| 筆談 | | 4(25) | 3(12.5) | 2(10) | 0(0) | 11(13.8) | 0(0) |
| その他 | | 0(0) | 0(0) | 2(10) | 0(0) | 0(0) | 0(0) |
| 無回答 | | 0(0) | 3(8.3) | 0(0) | 1(1.6) | 1(1.3) | 3(5.2) |
| 回答数 | | 16 | 24 | 20 | 61 | 80 | 58 |

表 5-18 に学習時に使用するコミュニケーションモードの中で、第 1 番目として挙げられたモードの数と割合を学年別に重複ありなしに分けて示し、表 5-19 には第 2 番目として挙げられたモードの数と割合を示した。音声と手話が主に用いられていることは、高等部本科全体の傾向と同じであったが、重複ありにおいて、音声の使用割合が減り、また重複なしと比較しても同様であった。一方、指文字と筆談は、重複ありにおいて第 2 番目に用いるモードとして、重複なしより割合が高かった。

以上の結果から、学習時に用いるコミュニケーションモードは、音声と手話が中心であるが、重複ありにおいては、指文字や筆談が、重複ありよりも多く用いられ、多様なモードを用いて学習を行っていることがうかがえる。

また普段使用するコミュニケーションモードの結果と比較すると、普段の会話での使用割合が高かった読話は、学習場面ではあまり利用されていなかった。これは、学習時は、黒板や文字が資料を見ることが多く、日常会話時とはコミュニケーションの環境が異なることも関連しているものと思われる。

10) 家族構成について（きょうだい、聴覚障害者の近親者の有無）

家族構成について、きょうだいがありと回答したのは、重複ありと重複なしを合計した高等部本科全体で、全回答数 266 件のうち 212 件で、79.7%であった。また重複ありの 1 年生では、81.3%、2 年生では 66.7%、3 年生では 75%であった。重複なしでは、1 年生は 82%、2 年生では 81.3%、3 年生では 84.5%であった。家族構成の「きょうだい」については、学年、重複のあり、なしにかかわらず、きょうだいがいるという回答が約 8 割であった。

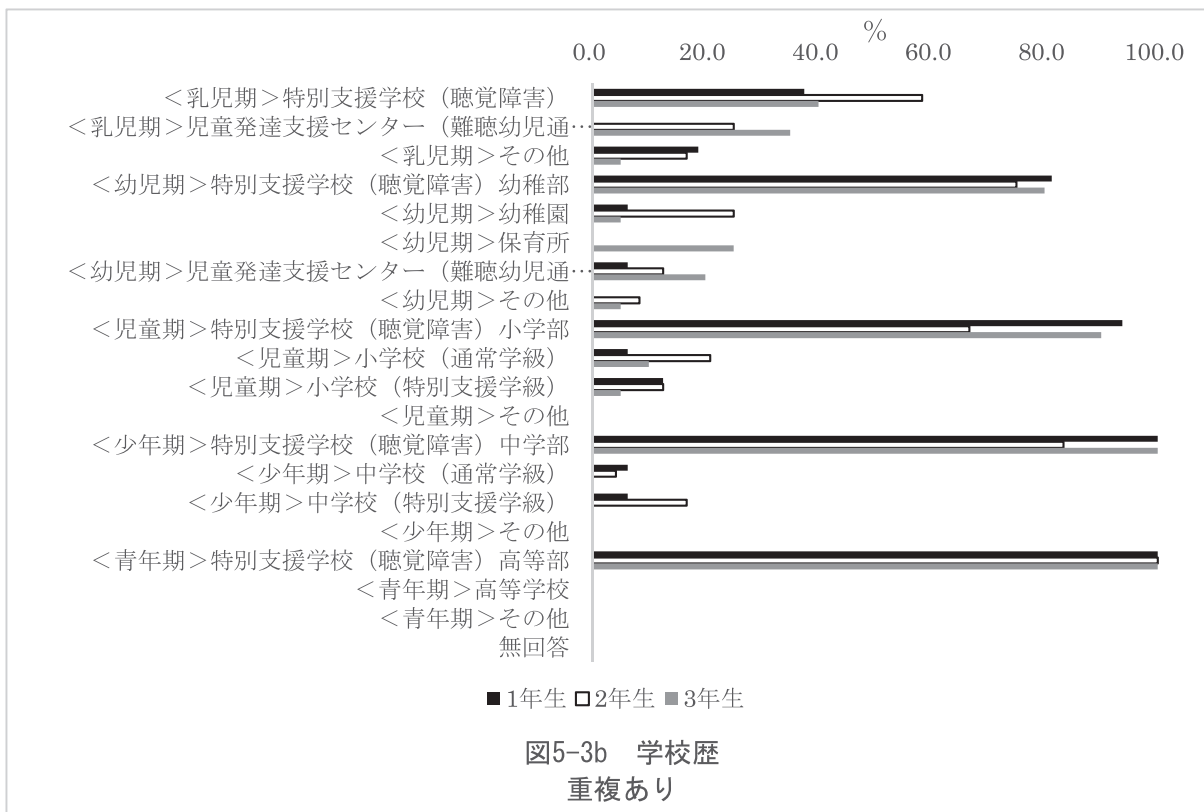
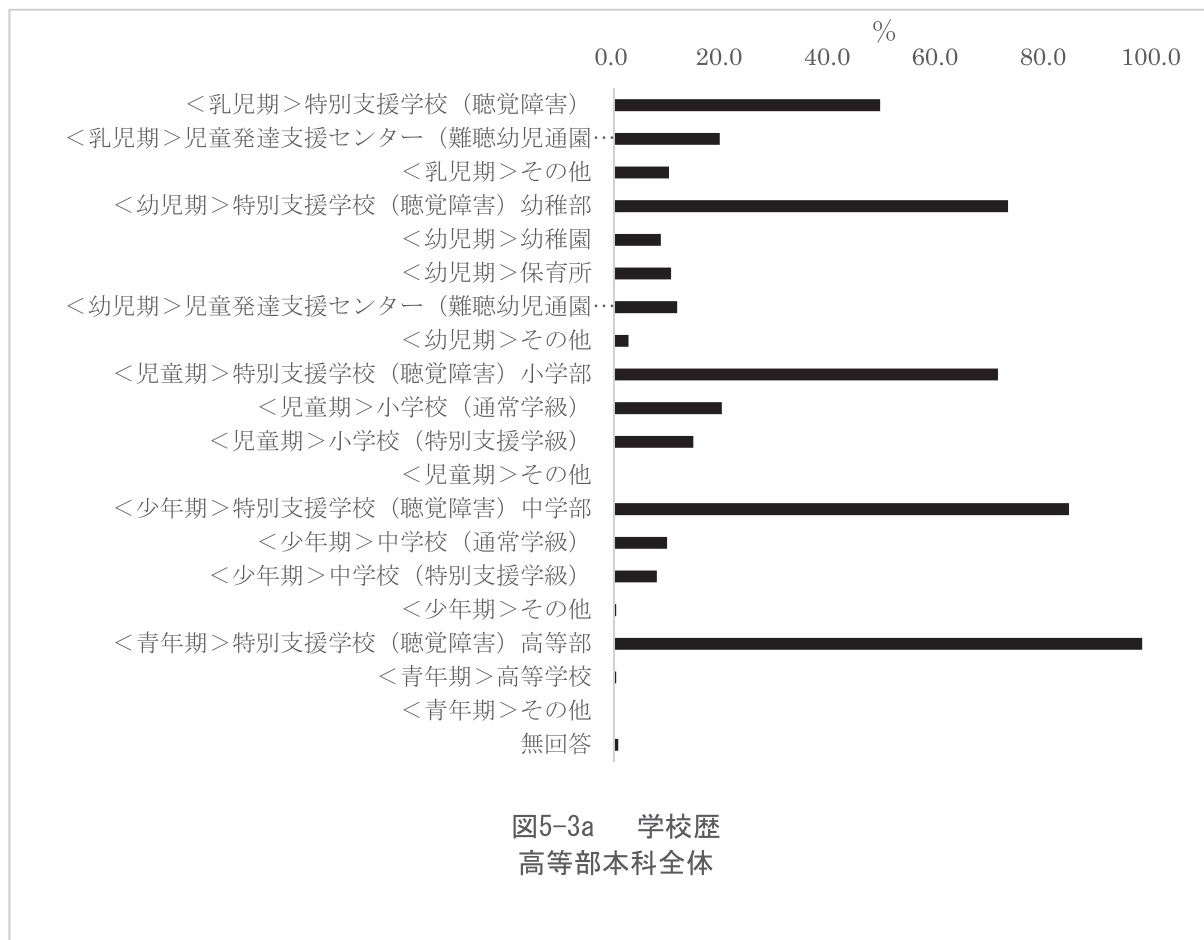
重複ありと重複なしを合計した高等部本科全体で近親者の聴覚障害者がありと回答したのは、全回答数 266 件のうち 35 件で、13.2%であった。また重複ありの 1 年生では、12.5%、2 年生では 4.25%、3 年生では 10%であった。重複なしでは、1 年生は 8.2%、2 年生では 17.5%、3 年生では 19.5%であった。家族構成の「聴覚障害者の近親者」については、学年のばらつきがやや見られたが、概ね重複のありなしにかかわらず、有るという回答が約 2 割であった。

11) 学校歴

学校歴を、重複ありと重複なしを合計した高等部本科全体（図 5-3a）、重複あり（図 5-3b）、重複なし（図 5-3c）に分けて図で示した。全体的傾向は、いずれの発達段階においても、聴覚特別支援学校への在籍率が、学年による割合のばらつきはあるものの一番高い。ただし、これは高等部本科において聴覚特別支援学校に在籍する聴覚障害児の結果であり、人工内耳装用児全体の傾向かどうかはわからず、普通校在籍者を対象とした同様の調査が必要であろう。

重複ありと重複なしの比較では、重複ありの特別支援学校の在籍率がやや高く、特に中学部段階で目立つが、高等部本科段階では、ほとんど差がみられなかった。「その他」については、乳幼児期に関する記述が 22 件と最も多く、主なものは医療療育相談機関が 7 件、学校などの教育機関 4 件、保育園が 3 件であった。幼児期には 6 件の回答があり、医療療育相談機関、保育園、幼稚園、大学病院などであった。児童期と青年期には回答がなく、少年期に「通級による指導」が 1 件見られた。学校歴の「その他」については、データも少なく、学年間や重複の有無しによ

る分析は困難であった。



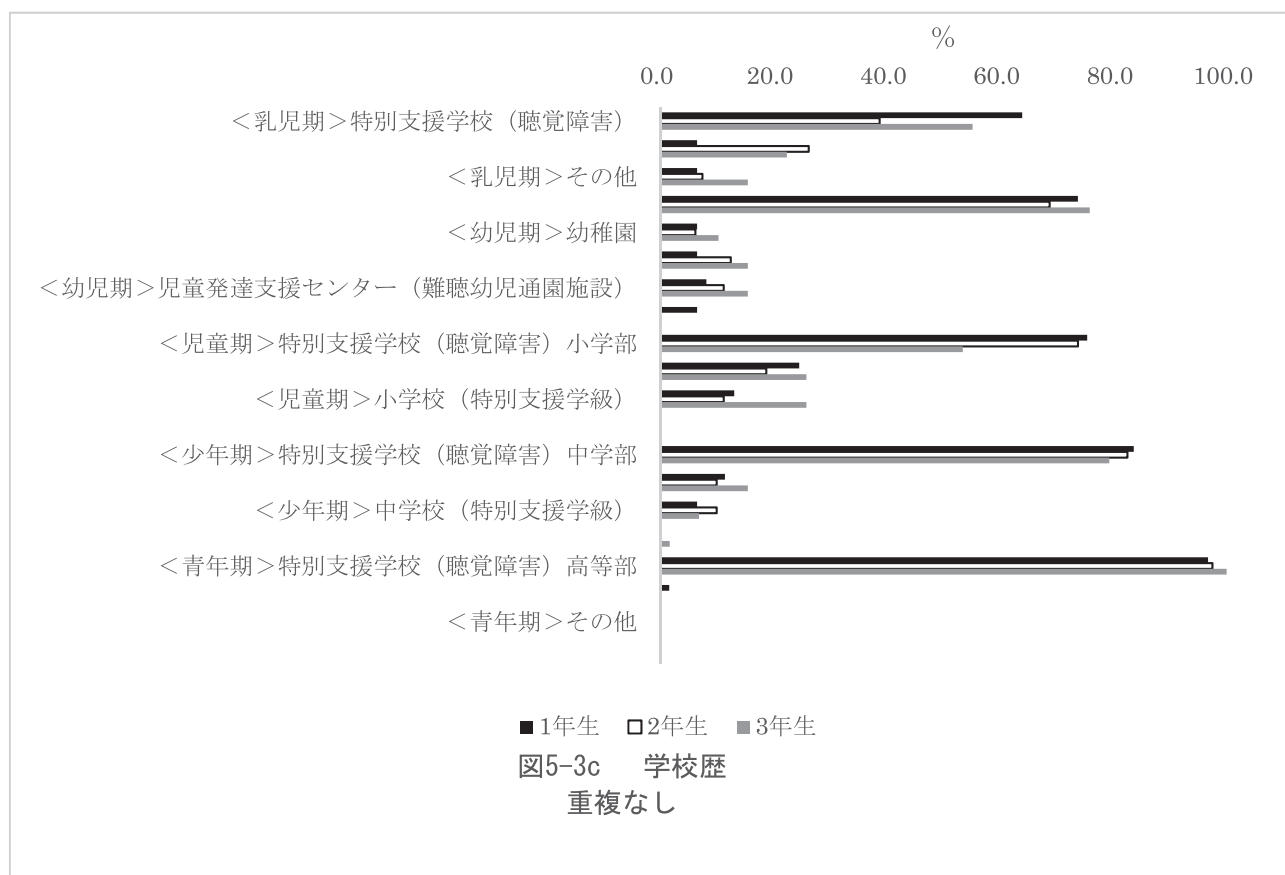


表 5-20 今後の進路の分類と回答数及び割合

| 重複の有無 | | 重複あり | | | 重複なし | | |
|--------|-----------------|---------|----------|--------|----------|----------|----------|
| 学年 | | 1年生 | 2年生 | 3年生 | 1年生 | 2年生 | 3年生 |
| 就職・その他 | 就職 | 9(56.3) | 22(91.7) | 14(70) | 31(50.8) | 38(47.5) | 24(41.4) |
| | 職業能力開発校 | 0(0) | 0(0) | 0(0) | 0(0) | 1(1.3) | 0(0) |
| | その他 | 4(25) | 1(4.2) | 5(25) | 3(4.9) | 2(2.5) | 2(3.4) |
| 大学等 | 特別支援学校(聴覚障害)専攻科 | 1(6.3) | 2(8.3) | 1(5) | 14(23) | 12(15) | 13(22.4) |
| | 高等専門学校 | 0(0) | 0(0) | 0(0) | 3(4.9) | 2(2.5) | 3(5.2) |
| | 筑波技術大学 | 0(0) | 0(0) | 0(0) | 7(11.5) | 12(15) | 7(12.1) |
| | 一般大学 | 1(6.3) | 1(4.2) | 0(0) | 18(29.5) | 25(31.3) | 8(13.8) |
| | その他 | 0(9) | 0(0) | 0(0) | 5(8.2) | 3(3.8) | 6(10.3) |
| 無回答 | | 2(12.5) | 0(0) | 0(0) | 4(6.6) | 0(0) | 1(1.7) |

12) 今後の進路

今後の進路について、重複ありと重複なしを合計した高等部本科全体では、就職がもっと多く、53.0%であった。進学は、一般大学が21.1%、特別支援学校(聴覚障害)高等部専攻科が16.5%、筑波技術大学が10%、高等専門学校が3.0%、その他が5.3%、職業能力開発校が0.4%であった。

進学の場合は、約半数であった。

表 5-20 に、重複障害ありとなしの結果を示した。重複障害ありなしともに、いずれの学年でも就職がもっと多いが、その割合は、重複ありでより高かった。重複ありの「その他」は、すべて福祉的就労であった。重複ありの進学希望先は、特別支援学校（聴覚障害）専攻科が多かった。重複障害なしでは、いずれの学年でも就職に次いで、一般大学への進学希望が多く、次いで特別支援学校（聴覚障害）高等部専攻科、筑波技術大学の順であった。また「その他」では 7 件回答があり、福祉的就労が 3 件、未定などであった。

以上のことから、今後の進路については、重複ありも重複なしも、就職を希望する者が、どの学年においても最も多いということが分かった。また進学については、重複なしのほうが高い割合であり、また専門学校や職業能力開発校も視野に入れられ、進学先が多様であった。

なお、重複ありと重複なしともに、「特別支援学校小学部」など、義務教育段階の学校を「今後の進路」として回答している例が見られたが、これは分析の対象としなかった。

13) 聴覚活用の状態について

①音への気づき

「音への気づき」は、「極めて良い」と「良い」を合わせると、「重複なし」74.9%、「重複あり」61.6%であり、良好な者が過半数である。これは、人工内耳においては、閾値そのものは 30dB 程度まで低下するため、重度聴覚障害者の補聴器装用閾値に比べるとかなり低い値に設定されているため、当然のことでもある。「重複なし」は「重複あり」に比べて良好な者が多い。

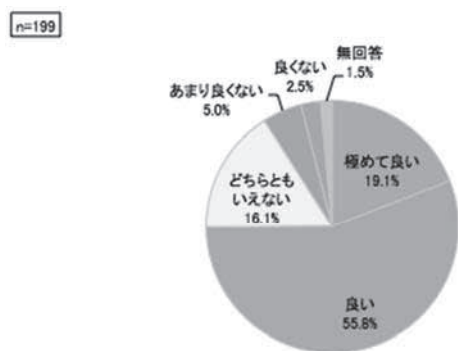


図 5-4a 音への気づき（重複なし）

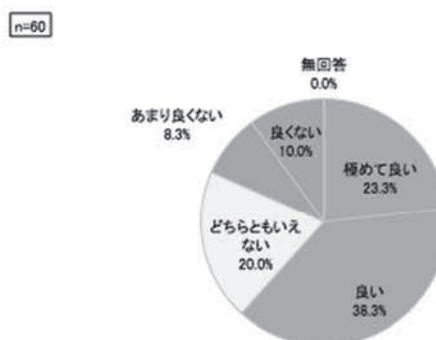


図 5-4b 音への気づき（重複あり）

②言語音の聞き取り

「言語音の聞き取り」は、「極めて良い」と「良い」を合わせると、「重複なし」63.8%、「重複あり」38.3%であり、「重複なし」は良好な者が過半数ではあるが、「重複あり」は「重複なし」に比べると少ない。前述の「音への気づき」と比較するとやや低い数字である。これは、音の検出閾値と語音聴取とは必ずしも相関するわけではなく、聴能的に理解されづらい一つの要因ともなっているのかもしれない。

n=199

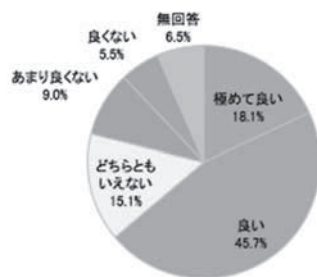


図 5-5a 言語音の聞き取り（重複なし）

n=60

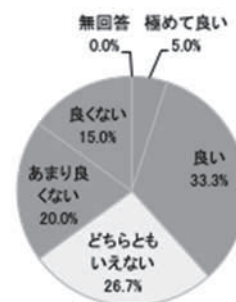


図 5-5b 言語音の聞き取り（重複あり）

③教師や友達の話に集中して耳を傾ける時の様子

「教師や友達の話に集中して耳を傾ける時の様子」は、「よくできている」と「できている」を合わせると「重複なし」69.3%、「重複あり」58.3%であり、良好な者が過半数ではあるが、「重複あり」は「重複なし」に比べると少ない。日本全国の特別支援学校（聴覚障害）高等部の多くは、コミュニケーション方法として、音声言語のみならず読話や手話・指文字等も使用しており、ここでの傾聴態度とは聴覚のみに限定されたものではなく複数のコミュニケーションモードが混在した傾聴態度といえるかもしれない。

n=199

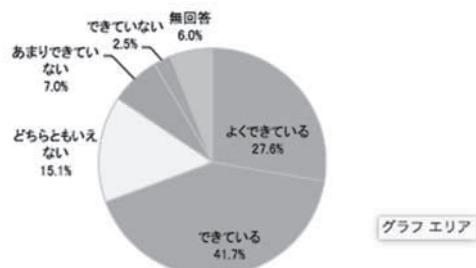


図 5-6a 教師や友達の話に集中して耳を傾ける時の様子（重複なし）

n=60

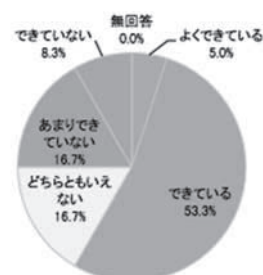


図 5-6b 教師や友達の話に集中して耳を傾ける時の様子（重複あり）

④聴覚活用に関する指導の現状と課題＜記述＞

主なカテゴリーとしては、「人工内耳の管理」「聴覚活用」「手話」「発音・発話」「日本語」「傾聴態度&行動面」の回答内容であった。以下、「重複なし」と「重複あり」に分けて結果を整理した。

・「重複なし」

145 件の記述があった。

「人工内耳の管理」について、「良好」4 件、「課題あり」3 件であった。「聴覚活用」について「良好」73 件、「課題あり」22 件であった。「手話の活用」について「良好」14 件、「課題あり」2 件であった。「日本語獲得」は「良好」4 件、「課題あり」12 件であった。「傾聴態度&行動」について「良好」4 件、「課題あり」24 件であった。

特に注目すべき記述をまとめると「聞こえてはいるが言語として認知できない」「本人は聞き取れていないという認識ができていない」「聞き取りで不十分な部分を手話等で補う」などであった。

・「重複あり」

53 件の記述があった。

「人工内耳の管理」については「良好」2 件、「課題あり」3 件であった。また、「聴覚活用」について「良好」24 件、「課題あり」18 件であった。「手話の活用」は 10 件であった。「日本語」について「課題あり」4 件であった。「傾聴態度&行動」について「課題あり」3 件であった

14) 言語活動（読み書き）

①同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた文法力

「同年齢の健聴の幼児生徒の平均値と比べた文法力」は、「低い」と「やや低い」を合わせると「重複なし」56.3%、「重複あり」95%であり、良好でない者が過半数である。さらに「重複あり」は低い者が著しく多いといえる。

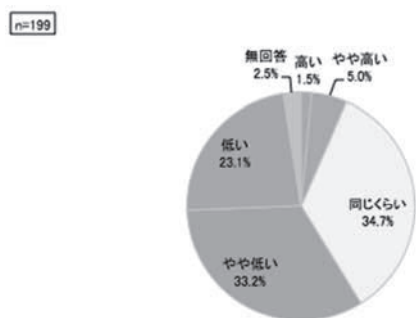


図 5-7a 同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた文法力（重複なし）

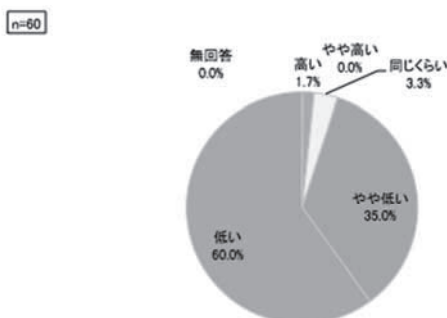


図 5-7b 同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた文法力（重複あり）

②同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた文章理解力

「同年齢の健聴の幼児生徒の平均値と比べた文章理解力」は、「低い」と「やや低い」を合わせると「重複なし」59.3%、「重複あり」91.7%であり、良好でない者が過半数である。さらに「重複あり」は低い者が著しく多いといえる。

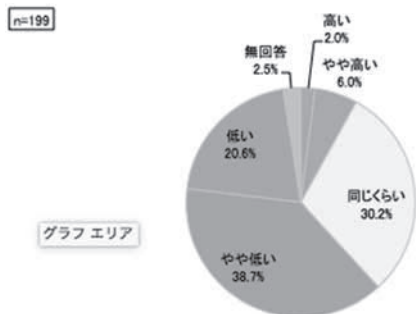


図 5-8a 同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた文書理解力（重複なし）

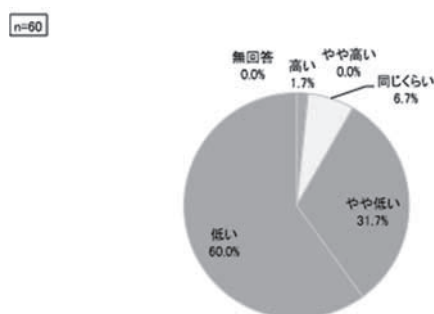


図 5-8b 同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた文書理解力（重複あり）

③同年齢の健聴の生徒の平均値と比べたメモなどの文を書く力

「同年齢の健聴の生徒の平均値と比べたメモなどの文を書く力」は、「低い」と「やや低い」を合わせると「重複なし」53.3%、「重複あり」93.4%であり、良好でない者が過半数である。さらに「重複あり」は低い者が著しく多いといえる。

n=199

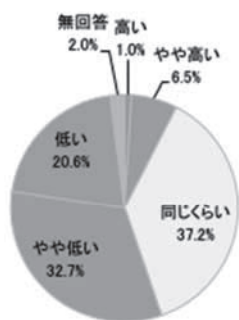


図 5-9a 同年齢の健聴の生徒の平均値と比べたメモなどの文を作る力
(重複なし)

n=60

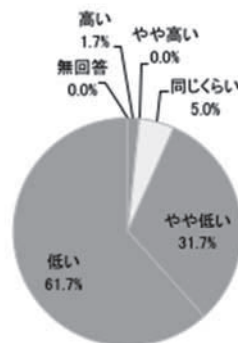


図 5-9b 同年齢の健聴の生徒の平均値と比べたメモなどの文を作る力
(重複あり)

④同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた文章構成力を含む作文力

「同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた文章構成力を含む作文力」は、「低い」と「やや低い」を合わせると「重複なし」67.3%、「重複あり」93.3%であり、良好でない者が過半数である。さらに「重複あり」は低い者が著しく多いといえる。

n=199

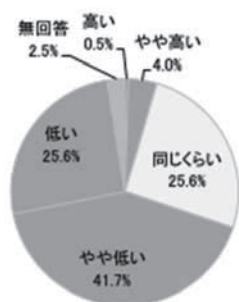


図 5-10a 同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた文章構成力を含む作文力
(重複なし)

n=60

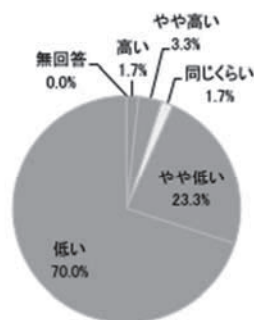


図 5-10b 同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた文章構成力を含む作文力
(重複あり)

⑤言語活動に関する指導の現状と課題＜記述＞

主なカテゴリーとしては、「聞く」「話す」「読む」「書く」「語彙」「助詞等」「文法・敬語」「学年相当」の回答内容であった。以下、「重複なし」と「重複あり」に分けて結果を整理した。

・「重複なし」

158 件の記述があった。

「聞く」については「良好」12件、「課題あり」14件であった。「話す」については「良好」15件、「課題あり」15件であった。「読む」については「良好」12件、「課題あり」18件であった。「書く」については「良好」12件、「課題あり」37件であった。「語彙」については「良好」13件、「課題あり」49件であった。「助詞等」については「良好」9件、「課題あり」25件であった。「文法および敬語」については「良好」7件、「課題あり」25件であった。「学年相当」については「良好」11件、「課題あり」2件であった。

重要な点を整理すると、「語彙を増やすことの課題」、日本語の「読み」「書き」や「助詞」、「敬語」などの課題があげられていた。特に「重複なし」においても言語的課題が多いことは注目すべきである。

・「重複あり」

56件の記述があった。

「聞く」については「良好」2件、「課題あり」2件であった。「話す」については「課題あり」3件であった。「読む」については「良好」3件、「課題あり」20件であった。「書く」については「良好」3件、「課題あり」28件であった。「語彙」については「良好」2件、「課題あり」27件であった。「助詞等」については「良好」2件、「課題あり」14件であった。「文法および敬語」については「課題あり」11件であった。「学年相当」については「良好」3件、「課題あり」6件であった。

5. 対象幼児生徒の学校での学習と生活について

1) 学業成績

①同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた現在の学業成績

「同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた現在の学業成績」は、「低い」と「少し低い」を合わせると「重複なし」64.3%、「重複あり」95%であり、良好でない者が過半数である。さらに「重複あり」は低い者が著しく多いといえる。

n=199

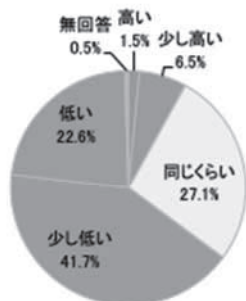


図 5-11a 同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた現在の学業成績（重複なし）

n=60

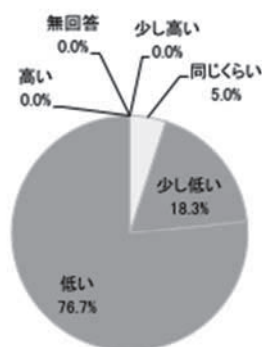


図 5-11b 同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた現在の学業成績（重複あり）

②潜在的な学習能力や知的能力と比べた現在の学業成績

「潜在的な学習能力や知的能力と比べた現在の学業成績」は、「比較できないほど低い」と「かなり低い」と「低い」と「やや低い」を合わせると「重複なし」53.2%、「重複あり」70.0%であり、良好でない者が過半数である。さらに「重複あり」は低い者が著しく多いといえる。

n=199

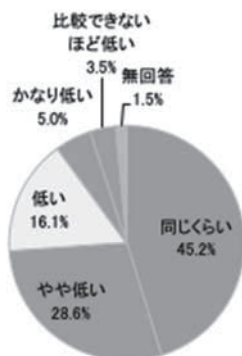


図 5-12a 潜在的な学習能力や知的能力と比べた現在の学業成績（重複なし）

n=60

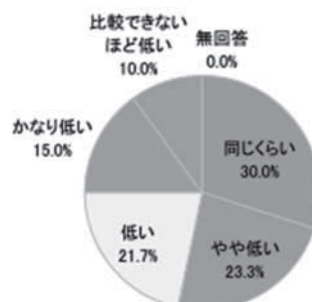


図 5-12b 潜在的な学習能力や知的能力と比べた現在の学業成績（重複あり）

③同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた読書力

「同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた読書力」は、「低い」と「少し低い」を合わせると「重複なし」51.2%、「重複あり」91.7%であり、良好でない者が過半数である。さらに「重複あり」は低い者が著しく多いといえる。

n=199

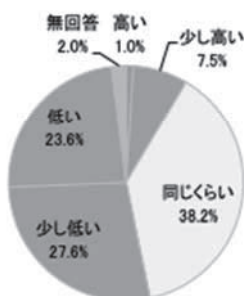


図 5-13a 同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた読書力（重複なし）

n=60

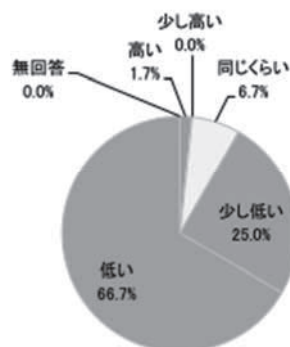


図 5-13b 同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた読書力（重複あり）

④学習の現状と課題＜記述＞

主なカテゴリーとしては、「日本語指導」「文字の活用」「手話の活用」「視覚的教材」「体験学習」「論理・抽象・思考」「反復学習・定着」「自信・意欲・集中」「学習習慣・主体性」「知的・発達障害・下学年指導」の回答内容であった。以下、「重複なし」と「重複あり」に分けて結果を整理した。

・「重複なし」

101 件の記述があった。

「日本語指導」33件、「手話の活用」2件、「体験学習」3件、「論理・抽象・思考」23件、「反復学習・定着」20件、「自信・意欲・集中」16件、「学習習慣・主体性」12件、「知的・発達障害・下学年指導」13件であった。

重要な点を整理すると、「日本語指導」、「論理・抽象・思考」、「反復学習・定着」、「自信・意欲・集中」「学習習慣・主体性」などであった。「知的・発達障害・下学年指導」の課題では、「重複なし」とされていながら、「発達障害等が疑われる者、下学年指導が適切な者の存在」に関する記述は留意すべきである。

・「重複あり」

49件の課題に関する記述があった。

「日本語指導」9件、「文字の活用」1件、「手話の活用」4件、「視覚的教材」1件、「体験学習」2件、「反復学習・定着」についての課題11件、「知的・発達障害・下学年指導」14件であった。

2) 学習態度

①同年齢の平均的な健聴の生徒と比べた注意散漫の程度

「同年齢の平均的な健聴の生徒と比べた注意散漫の程度」は、「重複なし」では「ほとんどない」28.6%、と「同じくらい」24.6%の2峰性となっているのに対し、「重複あり」では「多い」と「少し多い」を合わせると55%であり、「重複あり」では注意散漫の程度の多い者が健聴の生徒に比べて多い。

n=199

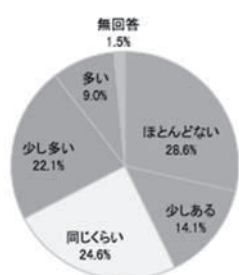


図 5-14a 同年齢の平均的な健聴の生徒と比べた注意散漫の程度（重複なし）

n=60

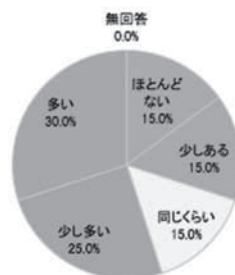


図 5-14b 同年齢の平均的な健聴の生徒と比べた注意散漫の程度（重複あり）

②同年齢の平均的な健聴の生徒に比べた注意持続の時間

「同年齢の平均的な健聴の生徒に比べた注意持続の時間」は、「重複なし」では「同じくらい」49.7%で最も多くなっているのに対し、「重複あり」では「短い」と「少し短い」を合わせると53.3%であり、「重複あり」では注意持続時間の短い者が健聴の生徒に比べて多い。

n=199

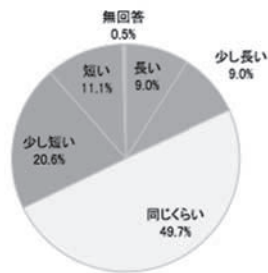


図 5-15a 同年齢の平均的な健聴の生徒に
比べた注意持続の時間（重複なし）

n=60

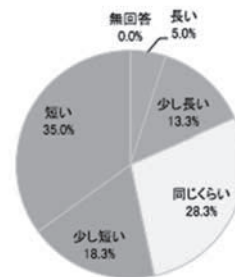


図 5-15b 同年齢の平均的な健聴の生徒に
比べた注意持続の時間（重複あり）

③口頭による指示に対する戸惑いや躊躇

「口頭による指示に対する戸惑いや躊躇」は、「重複なし」では「時々ある（他の子と同じくらい）」42.2%で最も多くなっているのに対し、「重複あり」では「多い」と「やや多い」を合わせると 58.3%であり、「重複あり」では 口頭の指示に対する戸惑いや躊躇のある者が健聴の生徒に比べて多い。

n=199

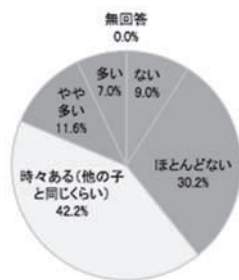


図 5-16a 口頭による指示に対する
戸惑いや躊躇（重複なし）

n=60

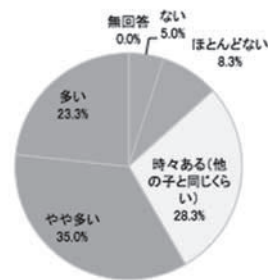


図 5-16b 口頭による指示に対する
戸惑いや躊躇（重複あり）

④学習態度に対する指導の現状と課題＜記述＞

主なカテゴリーとしては、課題として「聞き取り」「理解」「注意集中」「学習態度」「体験学習」「コミュニケーション」「状況理解」「思考」に関するものがあげられ、指導上工夫していることとして「見通しの指導」「視覚情報の活用」「授業展開の工夫」「コミュニケーションにおける確認」などの回答内容であった。以下、「重複なし」と「重複あり」に分けて結果を整理した。

・「重複なし」

101 件の記述があった。

課題として「聞き取り」7 件、「理解」12 件、「注意集中」31 件、「学習態度」18 件、「コミュニケーション」3 件、「状況理解」8 件、「思考」3 件があげられ、指導上工夫していることとして「見通しの指導」1 件、「視覚情報の活用」4 件、「授業展開の工夫」2 件、「コミュニケーションにおける確認」4 件、などの回答内容があった。

重要な点を整理すると、「重複あり」「重複なし」どちらも「注意集中」「学習態度」の課題があ

げられていた。指導上工夫していることとして、「見通しの指導」「視覚情報の活用」「授業展開の工夫」「コミュニケーションにおける確認」などは、特記すべき事項である。

・「重複あり」

49 件の記述があった。

課題として、「聞き取り」7 件、「理解」6 件、「注意集中 17」件、「学習態度 7」件、「コミュニケーション」1 件、「状況理解」1 件、「思考」0 件があげられ、指導上工夫していることとして、「見通しの指導」2 件、「視覚情報の活用」1 件、「授業展開の工夫」4 件、「コミュニケーションにおける確認」2 件、などの回答内容があった。

3) コミュニケーション能力

①同年齢の平均的な健聴の生徒に比したコミュニケーション能力

「同年齢の平均的な健聴の生徒に比したコミュニケーション能力」は、「重複なし」では「低い」と「やや低い」を合わせると 46.8%で半数弱であるのに対し、「重複あり」では「低い」と「やや低い」を合わせると 78.3%であり、「重複あり」ではコミュニケーション能力の低い者が健聴の生徒に比べて著しく多い。

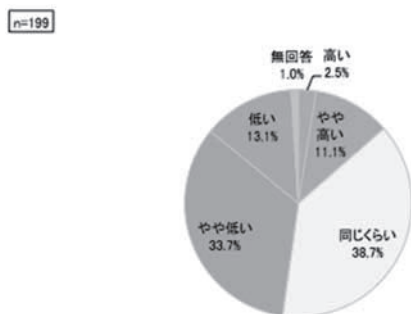


図 5-17a 同年齢の平均的な健聴の生徒に比したコミュニケーション能力（重複なし）

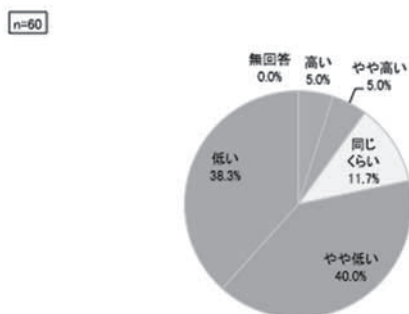


図 5-17b 同年齢の平均的な健聴の生徒に比したコミュニケーション能力（重複あり）

②同年齢の平均的な健聴の生徒に比した語彙力

「同年齢の平均的な健聴の生徒に比した語彙力」は、「重複なし」では「低い」と「やや低い」を合わせると 58.3%であるのに対し、「重複あり」では「低い」と「やや低い」を合わせると 95%であり、「重複あり」では語彙力の低い者が健聴の生徒に比べて著しく多い。

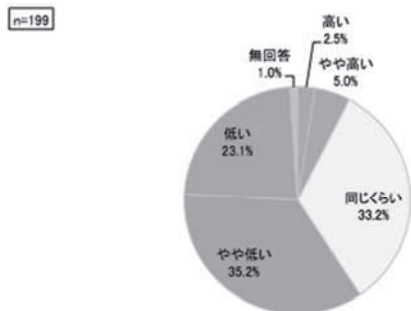


図 5-18a 同年齢の平均的な健聴の生徒に比した語彙力（重複なし）

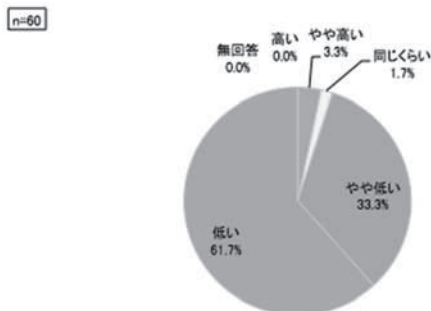


図 5-18b 同年齢の平均的な健聴の生徒に比した語彙力（重複あり）

③同年齢の平均的な健聴の生徒に比した出来事を話す能力

「同年齢の平均的な健聴の生徒に比した出来事を話す能力」は、「重複なし」では「低い」と「やや低い」を合わせると 40.8%であるのに対し、「重複あり」では「低い」と「やや低い」を合わせると 71.6%であり、「重複あり」では出来事を話す能力の低い者が健聴の生徒に比べて著しく多い。

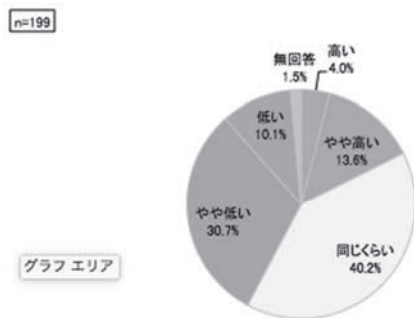


図 5-19a 同年齢の平均的な健聴の生徒に比した出来事を話す能力（重複なし）

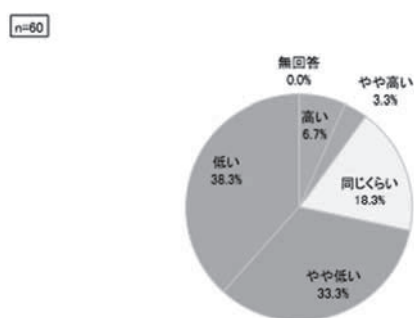


図 5-19b 同年齢の平均的な健聴の生徒に比した出来事を話す能力（重複あり）

④コミュニケーションにおける指導の現状と課題 <記述>

主なカテゴリーとしては、課題として「発達障害等」「メタ認知等」「対人関係・心理」「常識・コミュニケーション態度」「日本語・語彙」「口話・筆談」「手話」に関するものがあげられ、指導上工夫していることとして「SST」「筆談・メモ等の活用」「手話」などの回答内容であった。以下、「重複なし」と「重複あり」に分けて結果を整理した。

・「重複なし」

143 件の記述があった。

課題として「発達障害等」4 件、「メタ認知等」29 件、「対人関係・心理」2 件、「思考・論理・知識」14 件、「常識・コミュニケーション態度」43 件、「日本語・語彙」53 件、「口話・筆談」13 件、「手話」3 件であった。

指導上工夫していることとして「手話」1 件であった。

以上についてまとめると、「重複あり」「重複なし」とも「日本語・語彙」、「常識・コミュニケーション態度」、「メタ認知等」が重要な課題といえる。

・「重複あり」

51 件の記述があった。

課題として「発達障害等」4 件、「メタ認知等」11 件、「常識・コミュニケーション態度」13 件、「日本語・語彙」21 件、「口話・筆談」10 件、「手話」3 件であった。

指導上工夫していることとして「SST」1 件、「筆談・メモ等の活用」5 件であった。

4) 学校生活

①教師の質問やクラスメートとの話し合いに対する参加状況

「教師の質問やクラスメートとの話し合いに対する参加状況」は、「重複なし」および「重複あり」において「他の子と同じくらい」がそれぞれ 36.2%、33.3%と最も多いが、「多い」と「やや

多い」を合わせると「重複なし」38.7%「重複あり」25%であり、「重複なし」の参加状況は「重複あり」に比べて良いといえる。

n=199

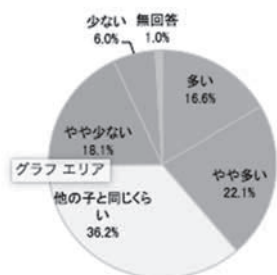


図 5-20a 教師の質問やクラスメートとの話し合いに対する参加状況（重複なし）

n=60

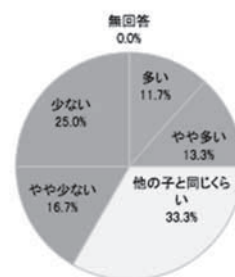


図 5-20b 教師の質問やクラスメートとの話し合いに対する参加状況（重複あり）

②持ち物や宿題などの持参あるいは提出の状況

「持ち物や宿題などの持参あるいは提出の状況」は、「重複なし」では「常に持参・提出」と「ほとんど持参・提出」を合わせると 54.3%であるのに対し、「重複あり」では「常に持参・提出」と「ほとんど持参・提出」を合わせると 51.7%であり、両者とも良好な者が他の生徒比べて多い。

n=199

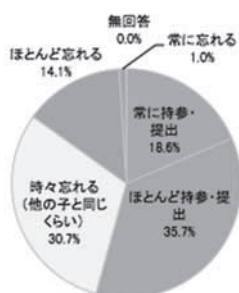


図 5-21a 持ち物や宿題などの持参あるいは提出の状況（重複なし）

n=60

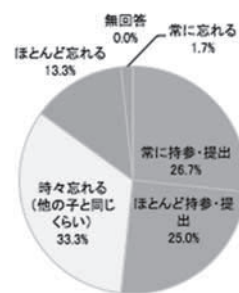


図 5-21b 持ち物や宿題などの持参あるいは提出の状況（重複あり）

③教師の指示の後、課題を遂行することの困難

「教師の指示の後、課題を遂行することの困難」は、「ない」と「ほとんどない」を合わせると「重複なし」54.8%「重複あり」21.7%であり、「重複なし」は「重複あり」に比べて良好といえる。

n=199

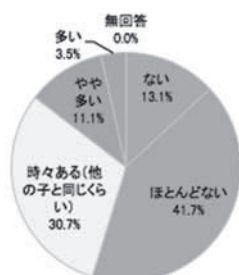


図 5-22a 教師の指示の後、課題を遂行することの困難（重複なし）

n=60

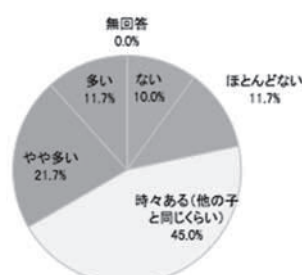


図 5-22b 教師の指示の後、課題を遂行することの困難（重複あり）

④生活指導の現状と課題＜記述＞

主なカテゴリーとしては、課題として「重複障害等」「心理面等」「問題行動」「集団行動・社会性」「自立・自信」「計画性」「学習・生活態度」「コミュニケーション」に関するものがあげられ、指導上工夫していることとして「個別指導」「メモ・例示・確認等」「ルール作り」「職員連携」などの回答内容であった。以下、「重複なし」と「重複あり」に分けて結果を整理した。

・「重複なし」

44 件の記述があった。

課題として「心理面等」4 件、「集団行動・社会性」4 件、「自立・自信」3 件、「計画性」3 件、「学習・生活態度」25 件、「コミュニケーション」9 件であった。

指導上工夫していることとして「個別指導」1 件、「メモ・例示・確認等」9 件であった。

以上についてまとめると、「重複あり」「重複なし」とも「心理面等」「集団行動・社会性」「計画性」「学習・生活態度」が重要な課題であり、特に「学習・生活態度」は特筆すべきといえる。また、指導上工夫している点については、「メモ・例示・確認等」があげられる。

・「重複あり」

21 件の記述があった。

課題として「重複障害等」3 件、「心理面等」4 件、「問題行動」1 件、「集団行動・社会性」1 件、「自立・自信」3 件、「計画性」2 件、「学習・生活態度」4 件であった。

指導上工夫していることとして「個別指導」4 件、「メモ・例示・確認等」3 件、「ルール作り」1 件、「職員連携」1 件、であった。

5) 学校での行動

①同年齢の平均的な健聴の生徒に比べ、学校での場にそぐわない行動あるいは不適切な行動

「同年齢の平均的な健聴の生徒に比べた、学校での場にそぐわない行動あるいは不適切な行動」は、「ない」と「ほとんどない」を合わせると「重複なし」64.4%「重複あり」38.3%であり、「重複なし」は「重複あり」に比べて良好といえる。

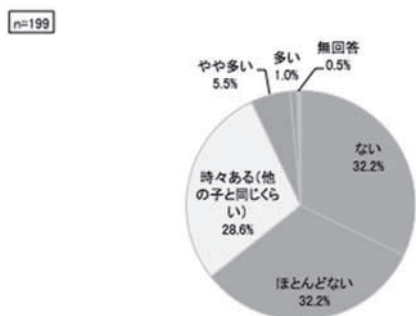


図 5-23a 学校での場にそぐわない行動あるいは不適切な行動（重複なし）

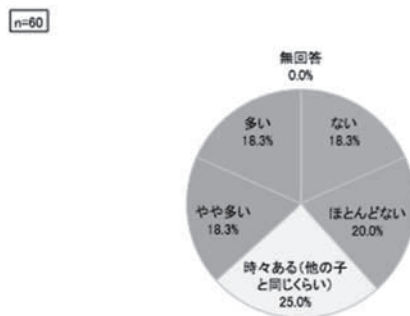


図 5-23b 学校での場にそぐわない行動あるいは不適切な行動（重複あり）

②同年齢の平均的な健聴の生徒に比べ、早い段階でストレスを感じたり、情緒的に落ち着かなくなったりすること

「同年齢の平均的な健聴の生徒に比べ、早い段階でストレスを感じたり、情緒的に落ち着かなくなったりすること」

くなったりすること」は、「多い」と「やや多い」を合わせると「重複なし」16.1%「重複あり」51.7%であり、「重複なし」は「重複あり」に比べて良好といえる。

n=199

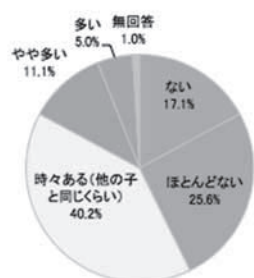


図 5-24a 早い段階でストレスを感じたり、情緒的に落ち着かなくなったりすること（重複なし）

n=60

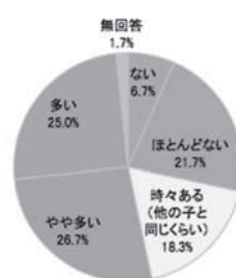


図 5-24b 早い段階でストレスを感じたり、情緒的に落ち着かなくなったりすること（重複あり）

③他の子どもたちとの良好な関係の維持

「他の子どもたちとの良好な関係の維持」は、「非常に良好である」と「良好である」を合わせると「重複なし」55.8%「重複あり」41.7%であり、「重複なし」は「重複あり」に比べて良好といえる。

n=199

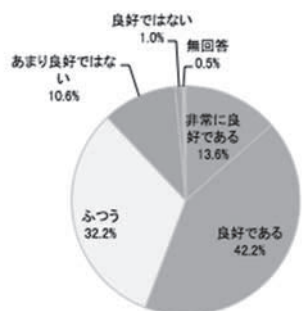


図 5-25a 他の子どもたちとの良好な関係の維持（重複なし）

n=60

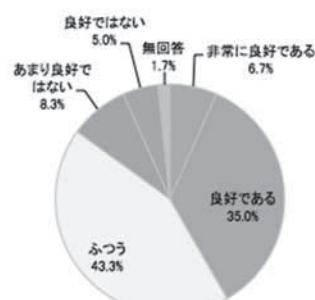


図 5-25b 他の子どもたちとの良好な関係の維持（重複あり）

④行動に対する指導の現状と課題<記述>

主なカテゴリーとしては、課題として「情緒・ストレス等」「行動面」「メタ認知」「障害認識」「状況理解」「見通し」「社会性」「コミュニケーション・対人関係」に関するものがあげられ、指導上工夫していることとして「対話・カウンセリング」「個別指導」「ルール・予定」「手話」「SST」などの回答内容であった。以下、「重複なし」と「重複あり」に分けて結果を整理した。

・「重複なし」

44 件の記述があった。

課題として「情緒・ストレス等」18 件、「行動面」19 件、「メタ認知」4 件、「障害認識」1 件、「状況理解」5 件、「見通し」1 件、「社会性」9 件、「コミュニケーション・対人関係」16 件であった。

指導上工夫していることとして「対話・カウンセリング」2 件、「個別指導」3 件、「ルール・予

定」1件、「手話1」件、「SST」2件であった。

以上についてまとめると、「重複あり」「重複なし」とも「情緒・ストレス等」「行動面」が重要な課題である。「重複なし」では、「コミュニケーション・対人関係」が特筆すべきといえる。また、指導上工夫している点については、「対話・カウンセリング」が重要と思われる。

・「重複あり」

30件の記述があった。

課題として「情緒・ストレス等」16件、「行動面」14件、「状況理解」4件、「見通し」1件であった。

指導上工夫していることとして「対話・カウンセリング」5件、「個別指導」8件、「ルール・予定」2件であった。

Ⅱ まとめ

高等部本科の調査結果について以下にまとめる。

- ・人工内耳を装用していたとしても、「聞き間違い」や「聞き逃し」の可能性は十分あるものの、本人の自覚に乏しいとの記述もあり、本人も含め保護者や教員は、聴能的な面で注意すべき点がある。生徒の実態に合わせた手話や指文字の使用が必要である。

- ・補聴器装用生徒と比較して人工内耳装用生徒は言語やコミュニケーションにおいて、そのメリットが大きい生徒もいるが、メリットがあまりない生徒もあり、かなりバリエーションがあるようである。人工内耳装用生徒については、そのような個人差の大きさをふまえ、その実態に応じた配慮が重要である。

- ・人工内耳装用生徒であったとしても、その聴覚活用や言語発達の程度に応じて、読話、手話や指文字、キューサイン等、多様な手段を利用することが必要である。

- ・聴能学的には、人工内耳では閾値の下降に伴い、「音への気づき」が良くなっており、これは、傾聴態度の良さに反映されていると思われる。「音への気づき」に比して言語音の聞き取りや言語力、コミュニケーション面、学習面では伸び悩んでいる事例が多い。このことは、特別支援学校（聴覚障害）に在籍する人工内耳を装用している聴覚障害生徒の大きな課題であるといえる。言語音の聞き取りについては、個人差、人工内耳手術前の言語獲得環境、人工内耳の装用時期および装用後の丁寧な言語指導が重要であり、これらはコミュニケーション面や学習面に影響を及ぼすことから、基本的には高等部本科の課題というより、早期発見後の乳幼児期からの療育・教育の課題であるともいえる。

- ・特別支援学校（聴覚障害）における生活面・行動面では比較的適応が良い。このことは、特別支援学校（聴覚障害）に在籍する人工内耳を装用する聴覚障害生徒にとって、特別支援学校（聴覚障害）のコミュニケーションに配慮した教育環境（手話や指文字、筆談の使用等）に適応できていることを示していると考えられる。